

8 近代医学黎明期の広島と浅野藩薬草園「日涉園」

原 田 康 夫

広島市街地北西部三滝町の丘陵尾根の末端に、住宅地に囲まれてこんもりとした雑木林風の森が取り残されている。これは、かつての浅野藩薬草園「日涉園」の一画である。廃園以降百数十年の時が経過し、特に昭和二十年の原爆被爆によって荒廃がかなり進んでいるが、庭をめぐる石段や池や水路に架かる橋に、往時の姿を偲ぶことができ、広島市指定史跡となっている。

「日涉園」は浅野藩藩医・後藤松眠（一七五五～一八二八）によって、寛政十年（一七九八年）に創設され、諸種の薬草を栽培し百草園といわれ、これまで後藤家子孫の努力によって営々と守られてきた。この「日涉園」あるいは後藤家は、幕末前の波乱に満ちた日本の近代医学の黎明期における広島の医学史といくつかの重要なエピソード

と深い関連を持っている。

後藤家の祖先は、代々医家で、はじめ福山の水野藩に仕えていたが、後に浅野藩に召しかかえられた。後藤松眠は広島県山県郡筒賀村の森家の出身であり、その子後藤松軒（一八〇三～一八六四）を長崎に遊学させ、吉雄塾において蘭学と医学を研究させた。この時、松軒はシーボルトの鳴滝塾で高弟として名を馳せていた高野長英と親交を結んだ。その後、シーボルト事件に連座することを恐れた長英が、長崎を脱出し江戸に戻る途中に広島に立ち寄り、平田屋丁の旅籠「三並屋」において一日おきに蘭学・医学の講義と住民の治療を行ったとされており、滞在中に長英が、「日涉園」を散策したことは想像に難くない。

長英らの広島滞在の世話をした人の一人が、星野良悦である。彼は、広島県で最初に人体解剖を行った医師で、二百年前に木で作られた人体骨格棋型（身幹儀）二体の木骨を作り、その一体を幕府の医学館に献上したのが寛政十三年（一八〇〇年）である。この木骨を見た杉田玄白はその精巧さに感嘆したと伝えられている。最初に作ら

れた木骨は、後藤家に伝えられて広島市指定重要文化財で長く広島県立美術館に保存されていたが、後藤家のご好意により新たに移築開館した広島大学医学資料館に寄贈された。

父の死により後藤松軒は、二五歳の時広島に帰り、父の医業を継ぎ藩医となった。高野長英は、渡辺華山とともに蘭学者弾圧の「蚕社の獄」によつて投獄され、後に放火・脱獄し各地を放浪することになるが、しばらく宇和島藩に匿われた後に広島を訪れている。この折り、松軒は長英を密かに「日涉園」の祠・神農堂に住まわせ、息子の浩軒(静夫)に食事を運ばせたと言われている。このため、後に藩主より七年間俸禄差し止めなどの咎めを受けるなどの史実が残っている。「日涉園」は静夫氏の時、明治四年に廃園になった。静夫氏は藩医であったが、後に大学東校で学んで帰広し、広島医学学校の創設に参画するとともに広島県立病院副院長として広島医学会(芸備医学会)に大きな貢献をした。

このたび、後藤家の皆さんの一致した御決断のもとに、歴史的遺産「日涉園」約四百坪が広島大学に移管される

ことになった。今後、「日涉園」を広島大学医学部の管理下におき、記録に基づいて薬草を配するなど庭を整備し、和漢医学の生きた教材として活用する計画である。

(広島大学学長)